

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520174

研究課題名(和文) コミュニティ音楽療法を核とした新しいコンサート・モデルの研究

研究課題名(英文) Research for a New Model of Concert Connected to Community Music Therapy

研究代表者

木村 博子 (Kimura, Hiroko)

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：00136699

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：3年間にわたり、在宅高齢者の地域復帰支援として行なっているコミュニティ音楽療法を12回、阿蘇市仮設住宅におけるコミュニティ音楽療法を10回実施し、その発展形としてのコンサートを6回実施した。それにより、参加高齢者の心身の活性化、自己尊厳の回復、社会意識の向上に有効な効果がみられた。またコンサートにおける地域在住の音楽家の出演は、地域住民の地元音楽文化の再発見ならびに演奏家自身の社会的意識の向上を促し、新しい療法的視点に基づいた演奏活動が始動する等、音楽活動における波及効果が確認された。音楽療法の知見を持つ学生たちによるコンサート企画運営は高齢者理解、異世代間交流の契機となった。

研究成果の概要(英文)：During the 3 years of this study, we carried out 122 Community Music Therapy sessions for the in-home elderly in Kumamoto City, 10 sessions for the elderly who live in temporary houses in Aso City, and 6 concerts with the aim of encouraging the elderly people of the areas and the revitalization of those local communities.

The results showed preferable change in 3 points: 1. activated body and mind of the elderly and so promoted their health. 2. restored self-esteem of the elderly. 3. regained community awareness. The performance of musicians who live in the local community at these concerts gave the local residents a chance to know their hidden local culture. Also the local musicians became more aware of the therapeutic power of their music and started a new way of musical activity aiming for the welfare of the community. The concerts were planned by young students, which helped to alter their image of the elderly and intergenerational exchange was promoted.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術一般

キーワード：コンサート コミュニティ音楽療法 在宅高齢者

1. 研究開始当初の背景

近年、わが国における高齢化問題は深刻さを増し、高齢者が健康で積極的に社会活動に参加する体制を作ることは喫緊の課題である。音楽療法是、1960年代から日本に導入され、特別養護老人ホームなど的高齢者施設や病院などに広く普及するようになったが、在宅高齢者で健全な社会生活を営むことが困難となった人々に広く音楽療法を開放する事業はほとんど行われていなかった。ヨーロッパ諸国ではすでに1970年代から「コミュニティ音楽療法」という形でそうした実践が行なわれており、本研究者はヨーロッパ諸国でのコミュニティ音楽療法の成果に基づき、高齢社会に対応するわが国独自のコミュニティ音楽療法を開発すべく、2006年より独居及び夫婦2人世帯の高齢者が多い熊本市子飼地域内商店街において、高齢者が気軽に立ち寄れる自由参加型のコミュニティ音楽療法を開始した。これは「お買い物帰りにちょっと1曲」をモットーとして、音楽を媒介としながら予防医学的に高齢者の健康増進を図ると共に、仲間作りや地域参加を促進しようとするものである。4年5ヶ月に及ぶ実施の間、本活動は地域に定着し、多くの高齢者の心の拠り所となったが、その中で明らかになったことは、高齢者が豊かな創造性にあふれているという点である。普段は「高齢者」という役割からか、表現や言動が控えめで、周囲も高齢ゆえに能力が低下しているとみなしがちであるが、音楽という自己解放が可能な場面では、経験知と潜在的才能から発する多くの創造的発想や文化的卓見を披瀝する。そうした創造性を音楽療法士と音楽家が支援して発展させ、作品としてコンサートにおいて発表することにより高齢者の文化を地域に発信していくことは、地域住民の高齢者の再評価と地域における高齢者の居場所を作ることに繋がる。その趣旨の下、本研究者は、7回のコンサートを実施して、高齢者文化の育成、地域住民の交流促進、大学と地域の連携、大学生の参加による異世代間の交流などを実現してきた。コンサート出演による高齢者の生きがい創出感はいわゆる高く、単なる健康維持活動や地域交流以上の精神的高揚を生んだ。またコンサート準備段階における高齢者と学生の交流は、学生の高齢者問題への気づきにつながり、社会教育としての意味も併せ持つことになった。

一方、昨今のいわゆる芸術的なコンサート事情は、一握りの商業音楽家だけに聴衆が集中し、才能ある音楽家が認知されないといういびつな構造を生み出している。特に地方においてその傾向は顕著であり、音楽大学を卒業し相当のキャリアを積んだ音楽家も、地方に帰れば他の仕事につかねばならないのが現状である。こうした事態は健全な音楽文化の発展を阻む深刻な問題であるが、音楽家側あるいは文化行政側からは有効な対応策がとられていない。彼らに演奏の場を提供し、

地域住民が郷土の誇りとして彼らを育てていくことができれば、芸術性の高い音楽が地方でも育つことになる。音楽家側にも音楽の療法的な社会性に対する認識が生まれ、新たな演奏活動が展開されていくことが想定される。

近代以前においては、音楽の主たる機能は広い意味での療法的であったことを考えると、「音楽療法とコンサートの融合」という形で新しい音楽文化を創出することは不可能ではなく、わが国の音楽文化、特に地方のそれにとって、新たな道を拓くものとしてきわめて有益だと考えられる。芸術は社会に還元されるべきであり、そのための一方策として本研究は位置づけられよう。

2. 研究の目的

本研究は、在宅高齢者の地域復帰支援として行なっているコミュニティ音楽療法において、コンサートを、高齢者の心身の活性化、地域住民のコミュニケーションの促進、地域文化芸術の振興の3つの目的に資するものとして位置づけ、従来にはない、目的指向型・療法的コンサート・モデルを確立し、新しい市民参加型音楽活動を支援する試みである。音楽療法場面から生まれた高齢者の創造性を、専門の音楽家や音楽療法士、学生らがコンサートを通して芸術音楽に高め、高齢者の地域参画とその文化の普及を促進することを目的とする。あわせて芸術性と療法的性を兼ね備えた、地方における新しいコンサート・システムの構築を目指す。

3. 研究の方法

研究は以下の3点を柱として行なわれた：
熊本市子飼地域におけるコミュニティ音楽療法の継続実施とその評価

これまでの研究フィールドである子飼地域のコミュニティ音楽療法を継続実施し、記述式アンケート、音楽療法実施時における聞き取り、ならびに音楽療法士による行動観察により評価を行った。今回は他地域（阿蘇市）においてもコミュニティ音楽療法を行い、コミュニティごとのニーズの比較も行った。

療法的コンサートの企画実施とその評価
コンサートは従来の形を踏襲し、コミュニティ音楽療法に参加した学生が高齢者文化とニーズを反映した形で企画構成し、県内の公共施設において広く一般に周知した形で6回行った。その内の3回は2012年7月に記録的な豪雨災害に見舞われた熊本県阿蘇市の復興支援を内容とし、その企画内容がどのようにコンサート自体に影響を与えるかについて考察した。評価は主に聴衆のアンケート、出演者および演奏家への聞き取り、学生のレポートを総合した形で行った。

療法的コンサートのモデル理論構築

上記の調査結果に基づき、実施可能なコン

サート・モデルを考案し、国内外の研究者との情報交換を行ない、日本独自のコミュニティ音楽療法コンサート・モデルを構築する。

4. 研究成果

本研究では、コミュニティ音楽療法を実践しつつ、その中から出てくる高齢者の文化的創成力をコンサートにおいて形にすることが焦点であった。熊本市子飼商店街での実践は研究開始の時点ですでに4年半を経過しており、高齢者の歌唱力は向上し、コンサートに対する積極性も涵養されつつあった。地域への浸透も順調に進んでおり、活動を拡大する上で下地は十分であったと言える。その上で今回行ったコンサートモデル研究について成果を報告する。

まず、コンサートの基本的な枠組みとしては、以下の要素を含む形式が効果的であることが、アンケート等により示唆された：

- ・ 地域における恒常的な音楽活動の存在
- ・ 聴衆参加型の双方向的な構成
- ・ 異世代間交流
- ・ プロ演奏家とアマチュアの交流
- ・ 社会参画の意識

以下、これらの背景となる事象について、若干の考察を加えたい。

地域活性を目的とするコンサートの実施には、地域におけるコミュニティ音楽療法の実施が有効である。

研究期間中、コミュニティ音楽療法を継続実施したことは、コンサートを運営する支持母体の育成・啓蒙の観点からきわめて有意義であった。研究期間中の継続実施で、コミュニティ音楽療法の参加者は部屋に入りきれないほど増え、多くの参加者が週1回の実践を生きがいにしていた。平均年齢76歳の誰でも参加できる療法型の音楽活動は、高齢による遠慮のために一般の文化活動から身を引かねばならなかった高齢者たちに文化活動参加の場を与えた。文化活動は休止したときから停滞が始まる。どのような優れた文化活動も一旦休止すれば消滅してしまい、その復活には多大な労力を要する。本研究が目指す地域連携型コンサートを実施する際には、コンサート単体ではその用をなさず、その母体となる支持基盤があって初めて可能である。その意味でコミュニティ音楽療法とコンサートの関係性はきわめて深く、あらためて草の根的活動が地域活性の大きな資源となることが示唆された。コミュニティ音楽療法も決してよい効果ばかりではない。人間関係の軋轢や対立も地域内に住む住民だからこそ起こりえる。しかし音楽という楽しみの多い活動とコンサート出演という目的性がそれらを越えて参加者の間に一体感を作り出した。「地域をよくしていこうとする音楽療法」の参加者であるという意識もそうした問題を乗り越える一助になったと思われる。こうした参加者の内面的心情はアンケート等

に反映されにくい性質のものであるが、複数の行動評価がこれらの把握に有効であった。

コンサートは離れた地域を結ぶ架け橋としての機能を有し得る。

研究期間中の2012年7月、北部九州豪雨災害が発生し、熊本県は甚大な被害を被った。特に阿蘇市の被害が大きく、1200を越える世帯が被災し、現在も約120人が仮設住宅で生活する。本研究においては、コミュニティ音楽療法の比較研究のために、阿蘇市を第二の実施場所として準備を進めていたが、災害のために一部計画を変更し、仮設住宅内の集会所でのコミュニティ音楽療法を開始した。この事態は当初計画には想定されていなかったが、結果的にはコンサートの新たな可能性を拓くものとなった。すなわち、コンサートの架け橋としての機能の発見である。研究スタッフと学生たちは、災害発生以降のコンサートのコンセプトを「復興支援」とした。コンサートの公共性を活用し、災害を風化させないためのメモリアルな行事としてコンサートを実施する試みである。研究期間中の6回のコンサートのうち、後半の3回がそれに該当する。熊本、阿蘇両市のコミュニティ音楽療法参加者は共に高齢者であり、コンサートで交流するためには移動の困難を抱える。そのため、研究スタッフが仲介役となり、熊本市民の復興を願う思いを阿蘇市の仮設住宅の入居者に届けるという形をとった。コンサート実施後、阿蘇市仮設住宅にコンサートの様子や聴衆たちの寄せ書きを届けたが、それは災害の風化を憂える阿蘇の高齢者たちに大きな力を与えた。コンサート終了後の聴衆アンケートでも、こうしたコンサートが「復興支援に役立つ」と回答した人は98%に上り、肯定的評価が得られた。移動に困難を抱える高齢者たちの社会に対する思いを結ぶ架け橋としての機能をコンサートは果たしたといえよう。

利他的思考が高齢者の社会参画を促進する。

上記に関連して、熊本市のコミュニティ音楽療法参加高齢者のコンサートに係る姿勢についても変化が現れた。通算7年にわたるコミュニティ音楽療法とコンサートの実践により、熊本市の参加高齢者たちは発声ならびに音楽的表現性の上で大きな進歩をみせていたが、「復興支援」のコンサートを企画した段階から、高齢者たちの音楽に対する取り組みが一層真摯なものとなった。すなわち、それまでは自らの健康増進や自らが所属するコミュニティのために歌っていたが、「他者のために」歌う行為が彼らに更なる力を与えたのである。高齢者たちはその長い人生経験の中で、戦争を始めとする様々な試練に遭遇してきており、特に昭和28年に大水害に見舞われた熊本市ではほとんどの高齢者が何らかの形で被災経験を持つ。それだけに阿蘇の水害は他人事ではなく、一刻も早く被災地に駆けつけたい気持ちを強く持って

いたが、高齢のためにどうすることもできず、社会的な無力感に陥っていた。しかし音楽によって復興支援に参画できると知って、彼らの音楽性と社会性は急速に伸びた。技術的に困難な復興ソングを必死で練習し、自らの思いを演奏に結実させていくそのプロセスはそれ自体が感動的であったが、本番での見事な演奏はプロのそれをも凌ぐすばらしいものであった。聴衆の反応もこれまで以上に肯定的で、高齢者に対する一般的な見方を覆すものとして多くの自由記述に賞賛の言葉が寄せられた。参加高齢者の音楽に対する姿勢が、単に自己の健康増進という個人的なレベルから、他者と地域への貢献という社会的なレベルへと広がりを見せたことは特筆すべきであり、利他的思考がその原動力となることは、今後の高齢者文化創成に大きな示唆を与えるものである。

地域在住のプロの演奏家が地域文化を活性化させる。

本研究において実施した6件のコンサートのうち、地域在住のプロの演奏家に出演を依頼したのは5件で、内訳はクラシック関係4件、ジャズ1件である。その際には演奏家にコンサートの趣旨を説明し、コミュニティ音楽療法の場にも実際に参加してもらうなどして、通常のコンサートとは異なることを理解してもらうよう努めた。プロの演奏家への依頼は、現在の地方文化活動が陥っている東京中心主義、あるいは商業的興行主義に対し、地方独自の音楽的リソースを開拓すべきであるという考えに基づくものであり、演奏の機会を増やすことで演奏家の地方定着を促進し、地方文化創成の核となってもらうことを狙いとすものであった。それはまた中央とは異なる形での演奏活動の開拓を意味しており、「療法的」「社会性」がそのキーワードとなるのではないかと考えられた。結果的に、これまで狭い範囲の音楽愛好家にしか知られていなかった演奏家たちは、より広い聴衆と出会うことになり、音楽層の拡大に貢献した。聴衆たちは未知の演奏家に対して郷土の誇りともいべき感情を持ち、彼らの活動への今後の注目が期待できた。また演奏家側にも、コンサート出演をきっかけに療法的な音楽活動への関心が高まり、高齢者施設や福祉施設へのアウトリーチ活動が開始されたことは注目に値する。音楽による地域振興は時間がかかるが、継続していくことによって様々な展望が拓けることが示唆されたことは本研究の重要な成果であろう。

最後に内外への成果発表と今後の展望を述べたい。

これらの研究成果は雑誌論文の他、研究代表者によって毎年国内外の学会で発表され、好評と共感をもって迎えられてきた。特に2013年のヨーロッパ音楽療法学会並びに2014年の世界音楽療法会議での発表は本研究の総括となるものである。また地元メディアを通して本研究の紹介が複数回行われ、地

域への周知もさらに進んだ。音楽療法ならびに介護関係の研修会における講演も継続して実施している。

今後の展望に関しては、さらなる活動の広がりや人材育成が重要であろう。国や自治体の支援に加えて、市民一人一人が地域文化に関心を持ち、育てていく態勢を整えることが必要である。そのためには講演会等の啓蒙活動が有効であろう。また、従来の概念に縛られることなく、自由な発想で行動できる演奏家や音楽療法士の育成も不可欠である。近代の純粹音楽至上主義とは異なる次元で思考できる専門家の養成は特に音楽大学等での教育に期待したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. 木村博子「音楽療法の可能性—日本人にとってのケアとしての歌」『先端倫理研究』(熊本大学倫理学研究室紀要)査読有, 第8号, pp.197-208, 2014. <http://hdl.handle.net/2298/29632>

2. Kimura, H. "How to place concerts as a part of therapeutic process in Community Music Therapy." 『文学部論叢』熊本大学, 査読有, 第103巻 pp.1-11, 2012. <http://hdl.handle.net/2298/24621>

〔学会発表〕(計 7 件)

1. Kimura, H. "Concert as Ritual – some special aspects of concert in Community Music Therapy." in The 9th European Music Therapy Congress. 2013年8月8日, オスロ, The Norwegian Academy of Music.

2. Kimura, H. "Music and the Aged Community- How music can benefit elderly people's health." in The 2nd Conference of International Association for Music and Medicine. 2012年7月4日, バンコク, Chulalongkorn University.

3. Gautier Nicolau, M. G., Kimura, H. "Music Therapy with Well-Elderly in Portugal and Japan: 2 case studies." in The 13th World Congress of Music Therapy. 2011年7月7日, ソウル, Sookmyung Women's University.

4. 木村博子, 西本由美「音楽療法コンサートの可能性に関する理論研究～療法的性を活かしたコンサートモデル確立の試み」第12回日本音楽療法学会学術大会, 2012年9月8日, 宮崎, シーガイアコンベンションセンター.

5. 木村博子, 西本由美「コミュニティ音楽療法におけるコンサートの役割」第11回日本音楽療法学会学術大会, 2011年9月11日, 富山, 富山県民会館.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木村 博子 (KIMURA, Hiroko)

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号: 00136699